

栗原敦先生を送る

——教育と研究——

栗原敦先生が定年を迎えて大学を去られます。栗原先生の研究者としての業績は次に紹介されている通りで、専門外の私から申し上げることは何もありません。

栗原先生と知り合ってから三十四年が経ちました。私は栗原先生から多くのことを学びました。その中でも特に大事だと思われたのは、未熟な者、弱いものに対し、優しい、そして暖かい目を注ぐということです。これは栗原先生の学問とも通じるものがあります。もう一つは信義ということとです。栗原先生はご自身の信用を失墜させるようなことを一度もなさいませんでした。人の言うことに耳を傾け、熟慮の上で行動をされてきました。筋の通らないことには妥協されませんでした。優れた人格は周囲の人間を感化します。いつの間にか、栗原先生に恥じるようなことはしな

国文学科主任 佐藤 悟

いというのが私の目標となりました。

最近の世間の風潮は経済ということが優先されているように思われます。「経済効果」や「経済効率」ということがものにのごとの説明に使われ、ことの善悪よしあしという基準はどこかに消え去ってしまっています。「気品」ということは聞かれなくなりました。少し前に「清貧」ということばがはまりましたが、それも単なる流行に終わってしまったようです。品のない時代になってしまったと嘆息するのは私だけでしょうか。

大学に進学するのは就職のためであり、社会人としての知識を増やし、企業に入って論理的な思考ができるようになるという功利的な側面ばかりが強調されています。真理を追究するとか、学問を通じて人格を形成していくという

ことも、ほとんど言われなくなりました。かつては思考を極限まで追い詰め、見えないものを見るようにするのが学問で、それに触れるのが大学という場であったのだろうかと思います。

また情けないことに大学はサービス産業ともいわれています。学生は面白い授業を望み、それに迎合する教員がよしとされています。教員が書く論文の質が問われることはほとんどなく、論文点数が問題とされます。教育と研究は車の両輪で、研究のできない教員が学生に対して論文指導などできるはずがありません。膨大な数の論文が印刷されていますが、論文の内容も概説と研究の区別がつかなくなっているものを多々見かけます。教育も質より量が重視される時代となってきました。このような状況の下で、どのようにして独創的な学生を育てられるかが、大きな課題となっています。

学生の方も、ネットや簡単な概説書で得た知識や、教員の示唆を熟慮することなく演習で発表したりしています。とことん突き詰めて考えるという学生が少なくなりました。「道聴塗説」ということを嘯みしめるべきでしょう。ぎりぎりまで自分を追い詰めることは、自らの人格の形成に大きな役割を果たしています。

このような世間の風潮に栗原先生は孤軍奮闘されてきま

した。研究者が同業の研究者から尊敬されるためには二つの条件が必要です。一つは卓越した業績があること、一つは人格が優れているということです。栗原先生はこの両方を兼ね備えた稀有といってもよい研究者です。たいいていの研究者はどちらかが欠けているか、あるいはどちらも持っていないことが多いように感じます。栗原先生と一緒に仕事ができただことは同僚としての誇り、栗原先生の授業を受けることができたのは学生にとっての幸福でした。

栗原先生は大学を去られますが、今後も研究者として第一線に立ち続けられることでしょう。また先生の御姿勢は学問以外にも絶えず多くのものを投げかけてくるでしょう。残された私たちはそれを追いかけていけるか、とにかく頑張るしかないようです。

